弥生人骨・脳
－第１次発掘調査時の分析・検討－

第１次発掘調査に伴い、人骨や脳は鳥取大学医学部の井上貴央教授（当時）のもとで分析が行われ、発見された人骨群がどのような特徴をもつ人々であったのかが詳細に検討されました。その結果、人骨群の性別や年齢、体形や風貌（ふうぼう）、病歴（びょうれき）などの貴重なデータが得られました。

脳１が見つかった頭蓋骨

脳２が見つかった頭蓋骨

中心域東側の溝から人骨が出土した様子

○性　別

寛骨（かんこつ）（骨盤）により５２体の性別が判断され、うち男性は３５体、女性は１７体でした。

○死亡年齢

頭蓋骨や寛骨の形状によって１０歳代から４０歳代にかけての年齢層の死亡が確認されており、男性では３０～４０歳代が、女性では１５～２０歳が多いことが判明しています。

○身　長

大腿骨（だいたいこつ）の長さから計算して、青谷上寺地遺跡の成人の推定身長は、男性で１６２㎝、女性で１４８㎝という値が得られており、渡来系弥生人の特徴である高身長の範疇（はんちゅう）に入ります。

○風　貌

青谷上寺地遺跡の人骨は、頭蓋骨の計測によって、縄文人とは大きくかけ離れており、韓国金海市の礼安里古墳群（４～７世紀）出土の人骨や、渡来系弥生人とされる福岡県の金隈遺跡、山口県の土井ヶ浜遺跡の人骨との類似性が高いことが分かっています。平たく面長（おもなが）な顔つきが想像されます。

○脳

３体の頭蓋骨の中から、残存する脳が発見されています（脳１～３）。頭蓋骨の形状から、脳１は４０～５０歳代の男性、脳２は３０歳代の男性、脳３は２０歳代の女性と判定されています。脳１は前頭葉にあたる部位で重さが２３０ｇ、脳２は細片で３０ｇ程度、脳３は前頭葉から頭頂葉にかけての部位で重さが３００ｇありました。なおこれらの脳は、現代人の脳と構造的な違いはみられません。